

# フランス語における帰結状況の表現

曾 我 祐 典

## はじめに

コミュニケーションの場で発話者はなんらかの事柄に言及するが、その際に、事柄の中核的事態だけでなく、それに伴う帰結状況も表そうとすることがある。ここでいう帰結状況とは、中核的事態がその成立の方向に作用するような事態で、目的または結果の関係において中核的事態に関わるものと考えてよい。このような帰結状況を含む事柄に言及する際に、フランス語で発話者がよく用いる、関係辞 *relateur* (R) に導かれる表現がどのようなものであるかを明らかにするのが本稿の目的である。

以下では、従来、よく用いる表現とされてきたものを目的と結果に分けて検討し(1), とくに従来の記述に問題があると思われる *telle* を含む表現と関係辞 *de façon* についてインフォーマント<sup>(1)</sup>の面接調査に基づいて考察を加え(2, 3), 帰結状況の代表的な表現がどのようなものであるかを示すことにしたい。

## 1. 目的と結果の表現

### 1. 1 目的の表現

中核的事態に目的の関係において関わる帰結状況を含むような事柄に言及するときに発話者がよく用いる表現には、どのようなものがあるだろうか。

まず、〈R+不定法表現〉と〈R+節表現〉のあいだの競合が認められる表現であるが、従来の記述によれば、次のような組み合わせを挙げることができ

る : 〈afin de inf/que sub〉, 〈de crainte (peur) de inf/que sub〉, 〈de façon (manière) à inf/(à ce) que sub〉<sup>(6)</sup>, 〈pour inf/que sub〉。このうち, 〈de façon à ce que sub〉は, 〈de façon à inf〉の類推による〈de façon que sub〉のヴァリエーションであると考えてよい。

de crainte (peur) は, 関係辞ではなく<関係辞 de+名詞 crainte (peur)>と見なすべきであろう。フランス語常用者はそのような語源意識をかなり強く持っていると考えられるからである。そのことは, 関係辞 par による par crainte (peur) もよく用いること, 〈dans la crainte de SN/de inf/que sub〉の組み合わせも用いることなどに表れている。

関係辞 afin, de façon, pour を含む発話は, 次のようなものである<sup>(6)</sup>。

- (1)a. Je m'enferme dans mon bureau *afin* d'étudier le dossier tranquillement.
- b. La caissière a bien vérifié la monnaie *afin* qu'il n'y ait aucune erreur possible.
- (2)a. Je travaille à mi-temps *de façon* à mieux m'occuper de mes enfants.
- b. Je mettrai la radio plus fort *de façon* (à ce) que toute la famille puisse entendre.
- (3)a. Nous lisons le guide *pour* trouver un bon hôtel.
- b. Il travaille *pour* que ses parents fassent ce voyage.

この他に, 〈en sorte de inf/que sub〉も考えられるが, これは原則として主動詞が faire, agir のような特定の動詞の場合に用いる特殊なものである。

次に, <R+不定法表現>は用いるが対応する<R+節表現>は原則として用いない表現としては, 〈en vue de inf〉を挙げることができる。

- (4) Nous nous sommes réunis *en vue* d'élaborer le programme trimestriel.

〈dans le but de inf〉, 〈dans l'intention de inf〉などについては, フランス語常用者は<関係辞 dans+名詞連辞>という語源意識を強く持っていると考えられる。それは, but, intention の限定語を変えたり (dans *un* but,

dans *cette* intention), 形容詞を付加したり (dans le *seul* but, dans un but *lucratif*; dans la *seule* intention, dans une intention *louable*) することができることから分かる。

〈R＋節表現〉は用いるが対応する〈R＋不定法〉は原則として用いない表現としては、〈de sorte que sub〉がある。

(5) J'ai loué une autre salle *de sorte* qu'on puisse se réunir librement.

従来の記述では<sup>(4)</sup>, 〈de telle façon (manière) que sub〉<sup>(6)</sup>, 〈de telle sorte que sub〉をこれと同類の表現と見なしている。しかし、2で述べるように、*telle* を含む表現を状況補語<sup>(6)</sup>と見なすことには問題がある。

## 1. 2 結果の表現

中核的事態に結果の関係において関わる帰結状況を含むような事柄に言及するときに発話者がよく用いる表現には、どのようなものがあるだろうか。

まず、〈R＋不定法表現〉と〈R＋節表現〉のあいだの競合が認められるようなものは存在しないと言ってよい。これまでの記述の中には、〈au point de inf/que ind〉をそのようなものとして扱うものもあるが<sup>(7)</sup>, フランス語常用者は、*au point* を関係辞と見るよりも、むしろ語源意識に従って〈関係辞 *à*＋名詞連辞 *le point*〉と認識していると考えられる。それは、〈à *ce/un/un tel point que ind*〉のように限定語を変えたり、à *ce point-là*, *au plus haut point* などの表現を用いたりすることなどにも表れている。

この他に、〈*en sorte de inf/que ind*〉も考えられるが、これは原則として主動詞が *faire*, *agir* のような特定の動詞の場合に用いる特殊なものである。

次に、〈R＋不定法表現〉は用いるが対応する〈R＋節表現〉は用いないという組み合わせであるが、そのようなものは存在しない。

〈R＋節表現〉は用いるが対応する〈R＋不定法表現〉は用いない表現としては、〈*de façon (manière) que ind*〉<sup>(8)</sup>, 〈*de sorte que ind*〉, 〈*si bien que ind*〉を挙げることができる。

(6) Nous nous sommes bien concertés *de façon* que nous avons pu finir

le travail assez vite.

(7) Le train a eu du retard, *de sorte* que je n'ai pas pu venir à notre rendez-vous.

(8) Il fait très lourd aujourd'hui, *si bien* que nous manquons d'appétit.

これまでの記述では<sup>(6)</sup>, <de telle façon (manière) que ind><sup>(6)</sup>, <de telle sorte que ind> をこれらと同類の表現と見なしている。しかし, 2 で述べるように, *telle* を含む表現を状況補語と見なすのは問題である。

### 1. 3 主な表現

上では, 一般に帰結状況の表現とされているものを見てきたが, 主なものをまとめると次のようになろう。

	目 的	結 果
afin	de inf/que sub	
pour	∅ inf/que sub	
en vue	de inf/ -	
si bien		- /que ind
de façon	à inf/(à ce) que sub	- /que ind
de sorte	- /que sub	- /que ind
de telle façon	- /que sub	- /que ind
de telle sorte	- /que sub	- /que ind

言及する事柄について思い描くイメージの構造に応じて発話者が不定法表現・接続法節・直説法節のあいだで行なう選択のメカニズムは, 曾我 (1986, 1990a, 1990b) などでも明らかにしたとおりである。すなわち, 中核的事態に目的の関係において関わる事態を含む事柄に言及する場合, 発話者は, 両事態の事行主体が同一であり状況の事態の自立性を低いと意識するときは, <R + 不定法表現>を含む発話を構成する (事行主体が同一でも, なんらかの要因によって中核的事態から帰結事態への移行がなめらかでなく, 帰結事態の自立性を高いと意識するような場合は<R + 接続法節>を用いる傾向がある)。事行主

体が異なるときは、両事態のあいだになんらかの分離・断絶があると捉え、帰結事態の自立性を高いと意識して、＜R＋接続法節＞を含む発話を構成する。

また、中核的事態に結果の関係において関わる事態を含む事柄に言及する場合、発話者は、両事態の事行主体の異同を問わず、帰結事態を中核的事態と明瞭に分離・断絶した自立性の高い事態と意識して、＜R＋直説法節＞を中核的事態の表現に後置する発話を構成する。直説法を用いるのは、帰結事態を現実の時間の流れの中に位置づけつつ想起するためである。

上に示した関係辞のうちで、*de façon* は、その後不定法表現も接続法節・直説法節も続けうる点で特異なものと言える。この *de façon* の同類と従来見なされてきたものに *de telle façon* がある。しかし、この表現は、使用条件が *de façon* と大きく異なっており、状況補語を導く関係辞と見なすことには問題がある。そのことを次の2で少し詳しく検討しよう。また、いくつかの点でこれまでの記述が不十分だと思われる *de façon* の用法に関しては、3で考察することにしてしよう。

## 2. *telle* を含む表現

### 2. 1 不定法表現の可否

すでに1. 1で見たとおり、目的の表現として、発話者はしばしば＜*de façon à inf*＞を用いる。

(9)a. Le chasseur a enfumé l'ouverture du terroir *de façon* à faire sortir l'animal.

b. *De façon* à faire sortir l'animal, le chasseur a enfumé l'ouverture du terroir.

(10)a. J'ai éteint les phares *de façon* à ne pas gêner les autres voitures. (MONNERIE, A. 1987, p. 179)

b. *De façon* à ne pas gêner les autres voitures, j'ai éteint les phares.

これに対して、目的の関係において中核的事態に関わる事態を表すために

〈de telle façon à inf〉を用いることはない。発話者が〈de telle façon que sub〉, 〈de telle façon que ind〉の組み合わせしか用いないのは、それらを〈tel(le)(s)+名詞...que...〉という相関表現と意識しているからである。

de telle sorte を含む表現についても、まったく同じことが言える。

## 2. 2 文頭の位置の可否

発話者は、〈de façon (à ce) que sub〉を中核的事態の表現に後置するだけでなく前置することもある。

(11)a. J'aménagerai la salle *de façon* que vous puissiez travailler tranquillement.

b. *De façon* que vous puissiez travailler tranquillement, j'aménagerai la salle.

(12)a. Le chef a parlé lentement *de façon* que tout le monde comprenne bien la gravité de la situation.

b. *De façon* que tout le monde comprenne bien la gravité de la situation, le chef a parlé lentement.

これに対して、〈de telle façon que sub〉を文頭に置くことは決してない。

(13)a. Nous agissons de telle façon que tout soit prêt demain.

b.\*De telle façon que tout soit prêt demain, nous agissons.

(14)a. Chaque copie d'examen sera corrigée de telle façon qu'il n'y ait pas de notes injustement attribuées.

b.\*De telle façon qu'il n'y ait pas de notes injustement attribuées, chaque copie d'examen sera corrigée.

〈de telle façon que ind〉も文頭に置くことはないが、これは、結果の表現は中核的事態の表現に後置するという一般的傾向にそうものであり、この組み合わせの特徴に数えることはできない。

〈de telle façon que sub〉を文頭に置くことがないのは、発話者がこの組み合わせを〈tel(le)(s)+名詞...que...〉という相関表現のひとつと意識している

ことによるものと考えられる。

〈de telle sorte que sub〉についても、まったく同じことが言える。

### 2. 3 様態補語との共起

様態補語との共起に関しても *de telle façon* を含む表現には制約が認められる。様態補語は、事態が含む事行のありさま・ありかたを表すために用いる表現であり、中核的事態に伴う状況を表すために用いる状況補語と明確に区別する必要がある。様態補語との共起は、〈*de façon (à ce) que sub*〉, 〈*de façon que ind*〉の場合にはいくらかでも見られるのに、〈*de telle façon que sub*〉, 〈*de telle façon que ind*〉の場合には、原則として見られない。

(15) (=12a) Le chef a parlé lentement *de façon* que tout le monde comprend bien la gravité de la situation.

(15') ??Le chef a parlé lentement *de telle façon* que tout le monde comprend bien la gravité de la situation.

(16) Il parle fort *de façon* que le monde l'entend.

(16') ??Il parle fort *de telle façon* que tout le monde l'entend.

(15), (16')のような発話については、インフォーマント全員が、「*lentement* や *fort* のような表現があるのなら *telle* は余計である」という反応を示した。ただし、*lentement*, *fort* のような様態補語を発し、さらにそれを補足するように *de telle façon que...* と言い添えるような特殊な場合も無いわけではない。上で様態補語との共起が「原則として」見られないと記したのは、そのためである。

様態補語との共起に関してこのような制約が認められる事実は、発話者が *de telle façon* を含む表現を用いるのが専ら様態補語としてであるということの意味するのであろう。

このことは、休止の置きかたからも確かめられる。インフォーマントの回答から、次のようなことが言えるのである。すなわち、(17), (18)のように関係辞 *de façon* を用いる場合に事柄のイメージ構造に対応して関係辞の直前に休止

を置くことがしばしばなされるのに対して, *de telle façon* を含む発話の場合に(19b, 20b)のように *de* の前に休止を置くことは, (19a, 20a) のような事柄のイメージ構造に対応せず不自然である<sup>6)</sup>。(相関表現の2つめの項〈*que...*〉の直前に休止を置くことはありうる)

(17) (=11a) J'aménagerai la salle (,) *de façon* que vous puissiez travailler tranquillement.

(18) (=16) Il parle fort (,) *de façon* que tout le monde l'entend.

(19a. J'aménagerai la salle de telle façon que vous puissiez travailler tranquillement.

b.\*J'aménagerai la salle, de telle façon que vous puissiez travailler tranquillement.

(20a. Dans le compartiment mes voisins parlaient de telle façon que je n'ai pas pu m'endormir.

b.\*Dans le compartiment mes voisins parlaient, de telle façon que je n'ai pas pu m'endormir.

*de telle sorte* を含む表現も, *de telle façon* を含む表現と同じく, 発話者は状況補語としてではなく, 専ら様態補語として用いると考えられる。

### 3. 関係辞 *de façon*

#### 3. 1 *de façon* と *pour*

関係辞 *de façon* についても, 従来の記述が十分であったとは言えない。目的と結果の表現に関わる問題をそれぞれひとつずつ取りあげることにしよう。まず目的の場合であるが, 発話者は, 目的の関係だけでなく, 中核的事態の成立のしかたを多少なりとも意識するときには, 他の関係辞よりも *de façon* を好んで用いる傾向があるようだ。

(21)a. Je travaille *de façon* à réussir au concours.

b. *De façon* à réussir au concours, je travaille.



関係辞 *de façon* には、このことに起因すると思われる制約が認められる。インフォーマントによれば、たとえば、「ケーキをつくるために小麦粉を買う」というような場合に、〈*pour inf*〉を用いるのはごく自然であるが、〈*de façon à inf*〉を用いるのは不自然である。とくに、中核的事態の表現に〈*de façon à inf*〉を前置するような発話はきわめて不自然である。

(22)a. J'achète de la farine *pour faire*/??*de façon à faire* un gâteau.

b. *Pour faire*/\**De façon à faire* un gâteau, j'achète de la farine.

中核的事態（小麦粉を買うこと）とそれに付帯する事態（ケーキを作ること）のあいだの因果関係は、一般常識によって、上の(22)a, (9), (10)などが対応する事柄の2事態間の関係に比べてもはるかに単純明快なものと考えられる。したがって発話者は、目的の関係があることを関係辞によって明示する必要をあまり感じないし、中核的事態の成立のしかたを意識することもない。その意味で過剰な情報を担う表現として、関係辞 *de façon* を避けるのであろう。

### 3. 2 *de façon* と *de sorte*

結果の表現の場合に関係辞 *de façon* を用いることは, GIRODET, J. (1981, p. 310) や HANSE, J. (1983, p. 401) が指摘するとおり、今日では次第になされなくなってきているようである。インフォーマントの回答からも、そのような傾向があることがうかがえる。とくに、中核的事態の表現が様態補語を含まないような場合には、〈*de façon que ind*〉の組み合わせを用いることがほとんどないようである。上に示した(6), (10)や次の(23)bは、それぞれ *bien*, *fort*, *violemment* といった様態補語を含んでいるが、そうではない(23)aのような発話は、インフォーマントのほとんどが不自然と判定する。

(23)a. ??Il est tombé *de façon* qu'il s'est fendu le front.

b. Il est tombé violemment *de façon* qu'il s'est fendu le front.

このような制約は、関係辞 *de sorte* には認められない。すなわち、結果の表現の場合に（目的の表現の場合と同じく）、中核的事態の表現が様態補語を含まなくても *de sorte* を用いることになんら問題はない。

- (23') Il est tombé *de sorte* qu'il s'est fendu le front.
- (24) \*Le train a eu du retard *de façon* que je n'ai pas pu venir à notre rendez-vous.
- (24') (=7) Le train a eu du retard *de sorte* que je n'ai pas pu venir à notre rendez-vous.
- (25) \*Elle lui a parlé *de façon* qu'il a été convaincu.
- (25') Elle lui a parlé *de sorte* qu'il a été convaincu.
- (26) \*Dans le compartiment mes voisins parlaient *de façon* que je n'ai pas pu m'endormir.
- (26') Dans le compartiment mes voisins parlaient *de sorte* que je n'ai pas pu m'endormir.

### お わ り に

以上のことから、フランス語における帰結状況の代表的な表現は、次のようなものであることになる。

	目 的	結 果
afin	de inf/que sub	
pour	∅ inf/que sub	
en vue	de inf/ -	
si bien		- /que ind
de façon	à inf/(à ce) que sub	- /que ind
de sorte	- /que sub	- /que ind

関係辞 *de façon* の用法については、3 で触れた点以外にも検討すべきことが多い。他の関係辞についても、それぞれ特有の使用条件があると考えられる。また、〈tel(le)(s)+名詞...que...〉という相関表現のこれまでの記述も十分とは言えない。それらに関しては、フランス語の使用実態の調査を続け、稿を改めて論じることにした。

## 注

- (1) 高学歴の20代から50代のフランス人(項目により3~11人)。
- (2) 関係辞としての *de façon* と *de manière* のあいだに認めうる差異は、本稿の論考には影響しないと思われる。したがって、煩雑さを避けるために、以下では *de façon* で両者を代表させることにする。
- (3) 本稿に示す発話例のうちで出典の注記のないものは、インフォーマントの協力を得てわれわれが作成したものである。
- (4) たとえば, DUPRE, P. (1972, t. II, p. 954), RUQUET, M. (1988, p. 49)。
- (5) この表現における *façon, manière* という語も、注(2)に記したのと同様の理由から、以下では *façon* によって代表させることにする。
- (6) 曾我(1989)で「状況要素」と呼んだもの。状況補語は、ある事柄にフランス語で言及する際に、中核的事態に付帯する状況を表そうとして発話者が用いる、動詞結合要素以外の要素であると言えることができる。
- (7) たとえば, DUBOIS, J. *et al.* (1973, p. 196)。
- (8) たとえば, GIRODET, J. (1981, p. 310), TOGEBY, K. (1982, t. 2, p. 208), RUQUET, M. (1988, p. 28)。
- (9) TOGEBY, K. (1982, t. 2, p. 209) にも、われわれとは異なる観点からであるが、同様の指摘が見られる。

## 引用文献

- DUBOIS, J. *et al.* (1973) : *La nouvelle grammaire du français*, Larousse, Paris.
- DUPRE, P. (1972) : *Encyclopédie du bon français dans l'usage contemporain*, 3 vol. Trévisé, Paris.
- GIRODET, J. (1981) : *Dictionnaire du bon français*, Bordas, Paris.
- HANSE, J. (1983) : *Nouveau dictionnaire des difficultés du français moderne*, Duculot, Paris-Gembloux.
- MONNERIE, A. (1987) : *Le français au présent*, Didier/Hachette, Paris.
- RUQUET, M. *et al.* (1988) : *Comment dire? Raisonner à la française*, CLE International, Paris.
- TGEBY, K. (1982) : *Grammaire française*, 5 vol., Univ. de Copenhague.
- 曾我祐典 (1986) : 「フランス語における叙法・構文の選択について」, 『フランス語フランス文学研究』49, 日本フランス語フランス文学会, pp. 84-94.
- (1989) : 「フランス語状況表現の記述のために」, 『年報フランス研究』23, 関西学院大学フランス文学科, pp. 1-13.
- (1990a) : La proposition circonstancielle en français, *L'Information grammaticale* 47, pp. 26-29.

(1990b) : 「関係辞 jusqu'à の構文と動詞叙法」, 『年報フランス研究』24, 関西学院大学フランス文学科, pp. 35-43.

——文学部教授——